

【書評】

アマルティア・セン (山形浩生 訳) 『インドから考える——子どもたちが微笑む世界へ』

NTT 出版, 2016 年, xxi+319 頁

本書は、アマルティア・センが、15年の間に書いた諸論説をまとめたものである。内容は多岐にわたるが、全体として、インドのさまざまな問題を論じながら、不正義をどのように理解すべきなのか、そしてどのように克服すべきなのかを伝えるものとなっている。

センは、学生時代よりサンスクリットの古典に親しみ、その古典から、単一のアイデンティティ(すなわち単一のあり方、生き方)が、人間に押しつけられる必要はないことを学んだとしている(10)。例としてセンは、4世紀ごろの作とされる『ムリッチャカティカー』(『土の小車』)を取り上げている(10-11)。この作品には、魅力的なヒロインであるヴァサントセナーが登場する。センは、彼女が、多様なアイデンティティを持つとする。センが述べるように、確かにヴァサントセナーは、富裕な娼婦であり、自身を顧みず喜捨を行い零落した、有徳の人チャールダッタを慕う恋人であり、そしてそのチャールダッタが、二人を殺そうとしたサンスターナカを許すことを支持する人物として描かれている。

センは、ヴァサントセナーがそうであるように、人間は、多様なアイデンティティを持ち得ると考える。ところが、人間は、多様なアイデンティティを持ち得るにもかかわらず、単一のアイデンティティを押しつける諸主張が存在し、インドに、そして世界に暴力を生んでいることをセンは指摘している(11)。例えば本来のインドは、複数の暦の存在が示すように、宗教的にも地域的にも多様

であるにもかかわらず(31-56)、あるいは個々のインド人は、ヴァサントセナーのように多様なアイデンティティを有するにもかかわらず、本書で繰り返し指摘されるように、ヒンドゥー教的アイデンティティこそが、インド全体の、あるいはインド人の絶対的アイデンティティであるとする主張が存在すること、あるいは、コミュニタリアンの主張に見られるように、人々は帰属する地域や文化以外のアイデンティティとは疎遠であるという理由から、または人々にとって帰属する地域や文化のアイデンティティの重要性は明白であるという理由から、帰属する地域や文化のアイデンティティが、人々のアイデンティティを決定するとの主張があることを(80-84)、センは指摘する。そのような主張は、その主張が絶対的とする単一のアイデンティティと異なるアイデンティティを持つ人間との間に壁を作り、そのような人間との争いを必然的なものと考えたりするため、暴力の原因となる。

しかしセンが指摘するように、宗教的、あるいは地域的アイデンティティが重要な場合もあるが、一方で、それ以外のアイデンティティが、必然的に重要ではないということにはならない。よって、人々にとって、十分な情報を得ながら、複数のアイデンティティについて自由に検討し、十分な理由に基づいて選択すること、つまり理性的選択が重要となる(77, 79-80)。

センは、単一のアイデンティティを押しつけられることなく、アイデンティティの理性

的選択を行えるという「ケイパビリティ（能力）」の拡大は、本当の「発展／開発」の一部なのだとする（83）。そしてセンは、人々が理性的選択を行えるように、社会として、人々に基礎的教育を保障し、読み、書き、算数をできるようにしたり、公に自由に対話ができるようにしたりすることなどが重要だと考えている（83-84）。

ここには、センのケイパビリティ・アプローチが表れている。センは、重要なアイデンティティ（すなわち自身にとって重要なあり方、生き方）を理性的に選択することが、人間にとって重要と考える。そして、諸個人の状況を、人々が理性的に価値を認めるさまざまなあり方、生き方をその人がどの程度実現可能であるか〔すなわちその程度がその人のケイパビリティ（能力）となる〕によって理解し、ケイパビリティの甚だしい欠如を不正義と理解すべきだと考える。そして、上記では、理性的選択を助けるとされた、読み、書き、算数ができる、公的に自由に対話ができるなどは、それぞれが人間にとって内在的価値を持つ重要なケイパビリティであるとされる（115-16, 143, 167）。

センは、人々が、アイデンティティの理性的選択を可能とするケイパビリティを持ち、十分な情報に基づく理性的な熟慮を行えば、明白な不正義を理解し、たとえその不正義が自身の福祉に直接影響せずとも、その改善にコミットすると考えている。例えばセンは、インドにおいて民主制が確立された結果、イギリス統治下では頻発していた飢饉が、その影響を直接受ける人間は、限られているにもかかわらず、発生しなくなったと指摘する。これについてセンは、民主制下において、飢

饉に関する情報が、自由な報道と、公的な自由な対話を通じて人々に広がり、それについて人々は理性的に熟慮し、さらに熟慮する人々の間での対話を通じての、いわば公的な推論が行われ、飢饉は是正すべきであるとの共通認識が生まれ、最終的には、その認識が政治を動かしたために、インドでは飢饉が起これなくなったと、述べている（228-29）。

ではなぜ人々は、直接影響を受けなくとも、理性的に熟慮した場合に、例えばケイパビリティの甚だしい欠如である貧困を不正義と理解し、その改善を求めるのか。センは、美德はそれ自体が報酬であって、貧困はそれ自体が罰であると述べる。つまり貧困それ自体が、これは不正義だとの理解を人々に十分にもたらし、その改善をなすべきことにするのだ、と述べる。そして、経済的還元論から貧困を考えることは（例えば貧困の改善が、暴力の抑制を通じて、人々に利益をもたらすと考えることは）、かえって、貧困の改善に向けた人々のコミットメントを弱める可能性があり、問題だと述べる（197-99）。

ここでセンは、経済的還元論から不正義を理解することを問題視する。確かに、太古より集団で生き、現在も集団の中で育まれる人間が、他者の窮状を無条件に救うべきと考える傾向性を持つことは否定できない。しかし、例えばその傾向性が、他者からの信頼を生み、属する集団や社会に調和をもたらし、諸協力を可能とし、社会的利益を生み、人々の生存と繁栄につながることを、人々が理解することは、その傾向性と調和し、むしろ強めるのではないだろうか。

（上山敬補：鹿児島国際大学非常勤）